

長岡の文化財 ブックリスト

※本は貸出中の場合があります。

『長岡の文化財』

長岡市教育委員会 / 編 長岡市教育委員会 2014

11 地域の長岡市指定文化財を区分別（国指定、県指定、市指定、登録有形文化財）に写真と解説で紹介。カラー写真で見やすく、約 350 件にのぼる、長岡の文化財の全容を知ることのできる一冊です。

『長岡市史別編 文化財』

長岡市 / 編 長岡市 1992

『長岡市史別編』として民俗編とセット（別冊）で刊行されました。長岡地域の様々な文化財を地域別に紹介しています。地域でどのように文化財が生まれ、引き継がれてきたのかがわかります。

『長岡市文化財マップ 建造物編』

長岡市立科学博物館 2014

長岡の文化財のなかでも歴史的建造物がどの地域に存在するのか、ひと目でわかる地図。建造物が写真付きで紹介されており、地域めぐりの参考になります。それぞれの地域に佇み、歴史を見つめてきた建造物を訪ねてみませんか。

『越後長岡まちめぐり 11 地域の旅』

越後長岡・まちめぐり実行委員会 2015

合併して生まれ変わった新長岡市の地域のお宝を発掘し、市民の皆様へ情報発信する目的で各地域を訪ねる「まちめぐり」、そしてそれをバージョンアップさせ、地域を越えた「テーマ別まちめぐり」の成果を紹介したもの。文化財を始め、見学コースにはまさに地域の宝と呼ぶべきポイントが多数あります。参加者の声や企画者のおすすめも紹介されており、まち歩きの際には必携です。

ここで紹介した本は、長岡市立中央図書館でご覧いただけます。貸出できるものもありますのでお気軽にお問い合わせください。

その他にも図書館にはたくさんの資料があります（長岡市議会の議事録や統計資料、地元発行の「夕刊北越新報」「長岡新聞」「新潟日報」など）。

どうぞご利用ください！



今年ば記念の年 火焰土器・旧長谷川家住宅

火焰土器 発見 80 周年

火焰土器は、関原町の近藤篤三郎が昭和 11 年（1936）の大晦日に発見したと伝わっています。高さ 29.5 cm、口径 30 cm の深鉢型土器で、口縁部の大きな突起が燃え盛る炎を思わせることから「火焰土器」の名称が生まれました。

その後、他の遺跡でも類似の土器が多数見つかかり、一般に「火焰型土器」と呼ばれるようになりました（火焰土器の名称は、近藤が最初発見した土器のみに使われます）。火焰土器と同時期につくられた土器群の総称として「火炎土器様式」も用いられます。

書名	著・編者	出版社・発行	出版年
古代の追跡 火焰土器から蒼い足跡まで	中村 孝三郎 / 著	講談社	1970
長岡市史 資料編1 考古	長岡市 / 編	長岡市	1992
長岡市史 通史編 上巻	長岡市 / 編	長岡市	1996
越後長岡の考古学者・中村孝三郎の軌跡	長岡市立科学博物館 / 編	長岡市立科学博物館	1998
火炎土器の研究	新潟県立歴史博物館 / 編	同成社	2004
火焰土器の国新潟	新潟県立歴史博物館 / 編	新潟日報事業社	2009
長岡郷土史 第53号 火炎土器の大きさ雑考 越後長岡・火焰土器の話(二)	小熊 博史 / 著	長岡郷土史研究会	2016

旧長谷川家住宅 再建 300 年

長谷川家は江戸時代初期以降、代々庄屋を勤め、幕末から明治にかけては近郊 4 か村の耕地や山林の 7 割を独占し、180 町歩余の田から 4000 俵もの小作料をあげた豪農です。

敷地は街道に面した間口約 70 メートル、奥行 120 メートルと広大な物で、周囲に濠をめぐらせているのが特徴です。主屋は宝永 3 年（1706）の大火で類焼し、享保元年（1716）に再建されたと伝えられ、県内最古の豪農の館です（国指定文化財）。

書名	著・編者	出版社・発行	出版年
重要文化財 旧長谷川家住宅 主屋・表門・井籠蔵・帳蔵・新蔵・庭塀・裏門 修理工事報告書	文化財建造物保存技術協会 / 編	越路町	1989
越路町史 資料編3近代・現代	越路町 / 編	越路町	1999
越佐の文化財(たからもの) 二十一世紀への遺産	新潟日报社 / 編	新潟日報事業社	2000
重要文化財旧長谷川家住宅主屋ほか 7 棟保存修理〈災害復旧〉工事報告書	文化財建造物保存技術協会 / 編	文化財建造物保存技術協会	2009

マル得情報！ 馬高縄文館に行こう

馬高縄文館は、「火焰土器」の発見で有名な国指定史跡「馬高・三十稲場遺跡」の隣接地にある、火焰土器をテーマとした日本で唯一の博物館（愛称：火焰土器ミュージアム）です。

「火焰土器」をはじめ、馬高・三十稲場遺跡で発見された国指定重要文化財「馬高出土品」など本物を展示・解説しています。